豊中市教育センター
〒560-0033 豊中市蛍池中町 3-2-1-600
TEL 06-6844-5290
FAX 06-6840-8127

平成 18 年(2006 年)3 月 20 日第 18 号

命を支える食だからこそ

我が家に１冊の古びた料理本があります。３０年ほど前、料理の基礎を習った際の本で、しみを増やしながら今も活躍しています。

一方、簡単・スピードの表題やおいしそうな写真に心が動き、つい買ってしまったものの、写真を眺めただけで、眠らせている本もあります。最近、買い求めた料理本には、私の楽しみな料理写真は一枚もないにもかかわらず、「調理以前」の表題に惹かれて買ってしまいました。「ゆでるとゆがくは大違い」「ゆでるはしっかり加熱する、ゆがくは主に野菜の下ごしらえに使われる言葉で、短時間で火を通すこと」「ご飯・汁をよそう」「よそうは、装うが短くなったもので、食べ物を美しく、おいしそうに整える気持ちがこもっている」など、基本的なことが掲載されています。食材から調理しなくても、料理がたやすく購入できる時代の影響か、手伝いとして調理する機会が少なくなったのか、一般的な料理の基礎用語を知らなかったり、調理技術が未熟であったりする人が多くなったと聞く延長線上に、この本の必然性がでてきたようです。

昨年、食育基本法が成立し、「食」の問題が多くとりあげられるようになってきました。この法律が策定されるに至った背景には、社会の変化とともに、「食」への意識の危うさがあるからでしょう。

食べ物は、食べて３０分もすると自分の体の一部になり、身体は何を食べたかによって、どういう体になるか決まってしまう。つまり、何を食べたかが、自分自身となると聞いたことがあります。食べることは命を支える重要な要素であり、年齢や性別に関係なく、誰もが、自分の五感をとおして、食材と対話し、楽しく作り、おいしく食べることができることが大切だと思います。子どもをとりまく家庭環境はさまざまな状況であるからこそ、子どもといえども、保護者に依存するのではなく、食に対して関心を持ち、調理する力も身につけていく必要があるのではと感じます。

では、豊中の子どもたちの食に関する日常はどのようなものでしょうか。「豊中の子ども像Ⅻ－食を中心とした子どもの生活実態からみえてくるもの」として本年度まとめましたので、ご一読いただけると幸いです。（榎本）

参考：「調理以前の料理の常識」講談社　渡邊香春子著

サイエンスクラブフェスティバルの開催

2月12日（日）10時～16時

高専ロボコンの大阪代表ロボット（府立高専）、人が乗れるホバークラフトの展示（四中）、無菌培養（園芸高）、藍染め（北野高）、トンボ玉作り（大池小）、牛乳パックカメラ（四中）、標本展示（大阪大学、教育センター）、パネル展示（大阪大学、八中）などの出展があり、多数の参加にわきました。

また、同時開催された親子理科講座では、「ロボットの今と未来」と題し、大和信夫さんのロボットのお話に子どもたちは興味津々で聞き入っていました。

大阪大学での授業　（豊中市社会教育活性化推進事業小学校連携授業）

3月1日（水）～10日（金）

庄内小学校、千成小学校、大池小学校、庄内西小学校、南丘小学校、寺内小学校の6校が、大阪大学を訪れ、タコの解剖、液体窒素、液状化、自然の中の回転、高分子ポリマーなどの授業を大学の実験室や講義室で受けました。

そのなかから、液体窒素の授業をされた江口太郎教授の講義の一部を紹介します。

先生が、液体窒素をビーカーとスチール缶にいれ、二つを高々と掲げられました。するとビーカーには霧がつき白くなっていました。一方、スチール缶は、霜がつく以外にもぽたぽたと液体が落ちていました。

先生はこんな説明をされました。「スチール缶は、熱がよく伝わるので、缶の外側まで液体窒素に近い温度になり、窒素より高い温度で液化する空気中の酸素が『ぽたぽた』と落ちるのです。」

そのあと「手品が不思議なのは、種があります。科学の不思議は、自然が不思議だから。」との話でしめくくられました。子どもたちにとって科学の不思議へ誘われた1日となりました。

「確かな学力向上のための学校づくり」推進事業（タッチ・座・サイエンス協力校）

3月15日（水）16日（木）

豊中市立第四中学校において、大阪教育大学の有賀正裕教授と教育大学の学生たちが一年生に化学の授業をされました。クラスを分割し、「指の模型づくり」「ルミノールの合成と発光」の2つの授業が並行して行われました。学生たちの指導のもとに一人ひとりが、それぞれ普段できない実験を体験しました。

ネットワーク配信コンテンツ活用事業報告会（文部科学省委託事業）

受賞

3月9日（木）～10日（金）東京千駄ヶ谷・津田ホールにて開催されました。

各地域からの報告会と嶋貫参事官の基調講演、パネルディスカッションなどが行われ、最後に今年度の授業実践コンテスト、アイデアコンテストの表彰式が行われました。授業実践コンテストにおいては、豊中市立第四中学校の熊野俊滋先生の実践報告「少人数による英語の授業への活用」が「子ども活用賞」に輝きました。また、参加者の投票によるアイデアコンテストでは、豊中市教育センターの「みんなで作ろう　学校ハンドブック」が優秀賞に選出されました。

第6回インターネット活用教育実践コンクール（文部科学省他主催）

豊中市教育センターの「ネットワークを使った教材の共有化と研修・研究の連携」が佳作に選ばれ、文部科学省から記念のメダルをいただきました。

豊中市特別支援教育事業

ー本年度の取り込みについてー

従来の障害児教育から平成 19 年度(2007 年度)の特別支援教育への転換をめざし、本市でも下記の事業を行いました。事業の報告と支援のポイントについてその一部をご紹介します。

特別支援教育コーディネーター養成研修

各校１名程度の参加体制で、５回にわたる研修を行いました。特別支援教育の概論からコーディネーターとしての視点や役割など系統的な内容で構成しコーディネーターの養成を目指しました。（のべ 274 名の参加）

巡回相談

伊藤一美先生、高橋泰子先生を相談員とし、特別支援教育推進園及び協力校を募り、とねやま幼稚園、小曽根小学校、北緑丘小学校、第十七中学校へ年４～5 回の巡回相談や校園内研修会等を行いました。詳しくは来年度の研修で報告いただく予定です。

専門家チームによる相談会

渡邉純先生、若宮英司先生、高達光子先生、そして教育センター所員を専門家チーム委員として、のべ８校の個別相談を行いました。当初は教育センターでの来所相談を計画していましたが、訪問相談の希望が多く、２回目以降は委員が学校へ訪問しての相談会となりました。（小学校６校・中学校２校）

最後に、これらの取り組みを通して、各校園や各学級で特別支援教育を進めていくための視点を講師の助言よりご紹介します。

支援・校内体制のポイント

- 何ができなくて困っているか？なぜできないのか？それができるにはどんな支援が必要か？という子どもの側にたった見方で支援方法を探る。
- 軽度発達障害は、障害が軽度ではない。気づきにくい、気づかれにくい障害なので、子どもからのサインを見逃さないようにすることが大切である。
- 校内委員会では、つまずきの原因を検討しどんな手立てが必要か検討する。
- 誰が動くのか？でなく、自分は何ができるのか？を考え、校内での役割分担を考え連携していく。（教材作り、支援体制等）
- 教室での支援は、子どもの特性に応じた「目標の設定」「指示や教材の工夫」「環境の整理」の３点から考える。
- ADHD の子どもには自尊感情を高めるためにも、基本的にほめられる体験を重ねることが効果的である。許されない危険な行動は即座に叱る。

なお、研修資料が必要な学校は、養護教育係までご連絡ください

（TEL. 6844-5293）

『先生、あのね』

Ａさんは小学校２年生の男の子。授業は静かに受けているのですが、何度注意しても忘れ物が多く、担任の先生としては少し気になる存在です。家でもしばしば保護者の話を聞いていないような時があるとのこと。それでは少し授業中のＡさんの心の声を聞いてみましょう。

さぁ、今から算数の授業だよ。教科書とノートと計算ドリルを出して…、あれ？教科書がないや。これは国語だし、これは自由帳だし…。あ、昨日の宿題プリントこんな所に挟まってたよ。後で先生の所に持っていかなきゃ。

先生が教科書はＢさんに見せてもらいなさいって。今日も忘れ物しちゃったよ…。今どこかな？昨日習った二の段の復習からか。このプリントはたくさん問題があって多いなぁ…。あっ、Ｂさんの筆箱今流行っているやつだ。格好良いな。そういえば、昨日のＴＶも面白かったな。いいところで終わるんだもん、続きが気になるよなー。ダメだ、ちゃんと授業を受けなきゃ。

あっ、笛の音だ。隣のクラスが運動場でドッジボールをしている。僕もしたいなぁ、だいぶ強く投げられるようになったからな。

ん？あれ？チャイムがなった。僕また聞いてなかったみたい…。

Ａさんの場合、行動面ではあまり目立ちませんが困っていることが三つあるようです。一つめは整理整頓。学校で配られたプリントや教科書を必要な時間に使えるように整理しておくことが苦手なようです。二つめは注意を持続すること。しなければいけないという気持ちはあるのですが興味が移りやすく、まとまった時間集中して課題に取り組めないようです。三つめは外からの刺激に反応しやすいこと。色々な刺激に気が散り、そこから頭の中で連想ゲームのようになっているようです。

これら三点からＡさんは、物・情報量などの整理やコントロールが苦手であると考えられます。真面目に頑張りたい気持ちがあるのにうまくできず、できない体験を何度も味わううちにあきらめ、自信喪失や劣等感を感じやすいのです。大人しいから困っていないのではなく、上手にＳＯＳがだせないだけかもしれません。

・必要なものと不要なものの区別を手伝ってみる。
・気が散りやすいのでドアや窓の近くの席は避ける。
・場合によっては最前列の席を用意する。
・聞いたことは忘れやすいので黒板やノートを視覚的に使う。

このようなサポートで子どもの心配が一つでも減ったとき、もっと素敵な笑顔が見られるかもしれませんね。　（廣瀬）